

『初宝鬼島台』に反映された一九の社会観と貧福論

法文学部 人文社会学科 四回生 森華菜

十返舎一九は今まで商売作家としての側面が注目されてきた。しかし一九の作品をいくつか読んでいくと、一九はある要素を何度も使っており、そこには共通点があると分かった。これは地口や言い回しを何度も利用する一九の作品の特徴と一致しているが、それ以外の理由があるものと考え、私は検討をした。するとその要素に対し一九が持つ意識以外にも、『初宝鬼島台』に一九の持つ社会観が表れていることがわかった。本研究では『貧福水掛論』『御徳用黄金艸鞋』『貧福蜻蛉返』『山神御祭礼』『金実身体直』『人心両面摺』『初宝鬼島台』の計七作品を読み進め、検討をする。これらは棚橋正博氏の『黄表紙総覧』を参考に、貧福をテーマに書かれている作品を選んだものである。

まず要素とは「浪費」と「分不相応」の二点であり、浪費は五作品、分不相応は七作品に見られた。これらは作品に登場する形は違っていたが、それらの要素に注意しながら読むと高い割合で作品に登場していた。そしてその「浪費」と「分不相応」を改めることにより、商売が栄え、家を再興するなどめでたい春を迎えることとなっていた。この点から一九は「浪費」と「分不相応」について、悪という考え方を持っていたことがわかる。またそれらを改めることで成功した生き方を手にする事からも、一九はそれらを改めるべきという意識を持っていたともわかる。

次に社会観について、『初宝鬼島台』の鬼ヶ島には当時の江戸の社会が反映されていると考えた。それは当時の流行、そして奢侈禁止という二点について共通点があり、それらを踏まえ考えると作品内の桃太郎と鬼の立場も、幕府と民衆として書かれているように読めるからである。鬼達が身に着ける着物の色や、彼らが染めるのに好ましいとした色や、髪形は当時の江戸の流行と一致していた。また、当時の江戸は飢饉や民衆の浪費により、困窮していた。それは鬼の浪費により宝物を失っていた鬼ヶ島と共通している。そしてそれをやめさせるのが桃太郎

であるが、幕府も奢侈禁止令を出し、民衆に浪費をやめるよう働きかけていた。このような点からも、鬼ヶ島と江戸、桃太郎と幕府、鬼と民衆はそれぞれの象徴として描かれていると考察した。このようなところから、一九の社会観が読み取れる。

以上から、一九は作品に明確な一九の貧福論を書いており、そして『初宝鬼島台』に彼の社会観を反映させて書いていることがわかった。

なお、本発表に基づく論文を『愛文』第六〇号（愛媛大学法文学部国語国文学会、二〇二五年三月刊行予定）に掲載する予定である。